

前回は「福音にふさわしく生活しなさい」(27節)と教えられました。今朝はそこから次へと進みます。

### 1. キリストのために (1章 29節)

#### ①あなたがたは

「彼らは」ではなく「あなたがた」です。ここで「あなたがた」とは、ピリピの教会の人々のことです。彼らは「あなたがた」と言われて、非常に緊張させられたことでしょう。漠然とした誰かではなく、具体的に「あなたがた」と指定されているのですから。そして、この「あなたがた」は聖書を読むすべての人にも「あなたがた」と言われて、迫ってくるのです。人ごとではなく、自分のことなのです。

#### ②キリストのために

武士は「主君のために」ということになり、第二次世界大戦の時の日本人は「陛下のため」「お国のため」と、戦争に向けられました。～主義のためにという人もいるでしょうが、今日の日本では「家族のため」というのが多いですね。特定の人物や物に傾倒することもあります。今、ここにパウロはクリスチャンを代表して、「キリストのために」と宣言しています。この方に命を懸けるという心で、パウロは「キリストのために」と記しているのです。言い方を変えれば、キリストは命を懸けるに値する方であると伝えているのです。

### 2. キリストを信じる信仰 (1章 29節)

#### ①キリストを信じる信仰

「キリストを信じる信仰」という言い方は、パウロによって何回となく使われています。このことの意味を考えるのにヘブル人への手紙 11章が参考になります。「信仰は望んでいる事柄を保証し、目にみえないものを確信させるものです」(1節)と定義し、「信仰がなくては神に喜ばれることはありません。」(6節)と語って、旧約時代の信仰者たちがどれほど神を深く信じて歩んだかを列記します。しかし、今や救い主であるキリストが世に来てくださったのですから、今や人間は「キリストを信じる信仰」によって立つのです。

#### ②賜った信仰

自分の意志で教会に行き聖書を読みキリストを信じた、という人もそのように導かれたのです。その信仰は賜ったのです。「あなたがたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです」(エペソ人への手紙 2章 8節)とあるとおりです。実際のところ、キリストを信じる信仰は、どんなに力をいれ、工夫をこらしても、人は信じません。ところが「今は恵みの時」とありますが、信仰は上から与えられるのです。

### 3. キリストのための苦しみ (1章 29～30節)

#### ①苦しみ

肉体上でも精神的にも苦しみは避けたい。苦しみから逃げたい。苦しみから解放されたい。そのように思うのが普通です。「夜と霧」(フランクル)には、収容所において究極的な苦痛を受けた人々の姿があからさまに記されます。その中にも一条の希望を見ている人は生きることができました。

#### ②賜った苦しみ

苦しみにも意味があります。「私たちが苦しみ会うなら、それはあなたがたの慰めと救いのためです。」(II コリント 1:6)とありますが、自分の苦しみによって他が慰めや救いを受けることがあるのです。キリストについていえば、「彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって私たちはいやされた。」(イザヤ書 53:6)とあるように、まさに主の苦しみは私たちのためでした。賜りものとしての苦しみがあるのです。また、だからこそ耐えることができるのです。「患難に耐え」(ローマ 12:12)を覚えましょう。

#### ③同じ戦いを

パウロはピリピにいた時も投獄されました。その時に看守一家が救われました(使徒 16:19～)。そして、今またこの手紙を書いている時も牢獄の中にあつたのです。「私について先にみたこと、また私についていま聞いている」とパウロが言う経験は、この書を読んでいるピリピ教会に連なっている人々に賜ろうとしているのです。

#### 《結論》

フランクルは「繊細な性質の人間がしばしば頑丈な身体の人々よりも、収容所生活をよりよく耐え得た」と言っています。苦しみを理解しようとする心は、単なる身体の強さにまさるということでしょう。キリストを信じる者たちには、十字架の主を知っていますから、苦しみの意味を学んで知っています。それゆえに、苦しみが自らにやってきた時にも、それを主とともに受け取っていかうとするメンタリティー(精神性)があるのです。そして、その苦しみは他の人々の慰めにもなることを覚えるときに、私たちは苦しみを主なる神様からいただくものであることを学ぶのです。苦しみがやってきたときに、私たちは祈りましょう。そして、主がともにいてくださることを信じましょう。もし、苦しみや悩みもなく過ごすことが許されているのなら、それを感謝しましょう。